

近世軍書の研究に対するアメリカ日本研究の有効性

井上 泰至

武士の〈神話〉の政治性

近世軍書とは、江戸時代に書かれた、戦争と戦士を描いた文学のこととして、これらの内実を問うことは、必然的に政治的な問いとなります。理由その1。江戸時代は、武士による支配が行われた時代であり、江戸の平和が続いて武士が官僚化しようとも、彼らのアイデンティティーは武士としてのそれでした。権力機構も軍事的なものに由来するものが多いのが特徴です。近世軍書は、そうした江戸時代における政治のあり方に直結していたことは当然です。理由その2。明治になって武士の身分は減びますが、近世軍書は、そのまま、あるいは編集された形で出版され読まれ続けます。これらの書物は、日清・日露の両戦争を通じて生まれてきたナショナリズム、特に武士道論と密接な関係があります。近世軍書は、そうしたイデオロギー拡大の一翼をになって甦ったわけです。理由その3。第二次大戦時には、やはりこの手の書物が盛んに出版されますが、その目的は戦意高揚のためにほかなりません。理由その4。その反動として、これらの書物は戦後民主主義において否定され、無視されました。端的に言えば、戦前の帝国文庫・有朋堂文庫に入っていたこれらの作品が、戦後の岩波の古典文学大系に入っていないのは、そのいい例でしょう。そして、理由その5。直接近世軍書を評価したわけではありませんが、だいたい1960年代から、ライシャワーやベラーといったアメリカの日本研究者が、江戸時代の武士の文化を再評価し始めました。それは日本の近代化を江戸時代が準備したという「近代化論」のひとつなのですが、特にライシャワーのような政治家は、こ

の歴史観を大使として在日中、日本のナショナリズム復活に利用しています。^① 文学研究の分野では、相変わらず近世軍書は無視されつづけていますが、このライシャワーの流れを受けて、近世軍書に取材する司馬遼太郎のような作家が現れたり、それらを原作にテレビで大河ドラマが制作されたり、と新しい武士の〈神話〉が一般に提供されていった、と今のところ私は見えています。ずいぶん大きな話から切り出しましたが、近世軍書が武士の〈神話〉であるからには、どの時代の関心に沿ってみても、必然的にそこには政治的な問題意識が入ってこざるをえない、ということをはじめに申し上げておきたかったのです。そして、近世軍書にほとんど光が当たらない日本文学の研究の現状では、かえって政治性に関心が高いアメリカ日本研究の視点はかなり使える、というのが私の結論というより、今日私が問題提起したい点です。

武士の〈神話〉とアメリカ日本研究

さて、まず、近世軍書の沿革からお話しておきましょう。^② 「軍書」とは、和漢の軍記・兵法書・家譜・武家故実書等、戦争にまつわる書物一般を本来指します。この語の由来は、「書籍目録」という江戸時代に出された出版販売目録の分類項目の一つなのですが、この発表での「軍書」は、史書・雑史・軍談・実録など軍語りの書物を狭義の軍書としてその対象としています。ただ、広義の軍書と狭義の軍書は作者が重なります。すなわち、それらの人々は、多く軍学者とよばれる人々で、戦国期には実際の戦闘においてその戦術・戦略をつかさどりましたが、平和な江戸時代になると、武士の教育や築城の設計、大名の家の来歴をまとめる役割へと転身しました。国文学研究資料館が調査中の山鹿素行以下歴代のコレクション^③や、私の勤務先の防衛大学校に寄贈されている戦前の軍人 有馬成甫氏のコレクション^④などが、その実態をよく残しております。狭義の軍書の理解には、こうした広義の軍書の存在とその背景も欠かせないので、あえて込み入った軍書の定義にこだわってみました。

さて、近世軍書は時代順に大きく4期に分類できます。第1期は、永禄～慶

長という戦乱の時代のもので、写本のみで伝わり、個々の戦闘の覚書、戦闘での果敢な働きを記した「令名」の記録にその特徴があります。名誉の戦死は武士の俸禄の根拠となったからです。第2期は、元和～寛文という戦争の終わった時期で、戦争の回顧・教訓や、平時の武士はいかにあるべきかを説いた倫理的な側面が出てきます。第3期は、長編歴史読み物の時代です。『前太平記』や『後太平記』など『太平記』の記述法にならって武士の歴史をつづったものや、水戸の歴史学の実証主義、すなわち、由緒ある古写本の蒐集による歴史復元作業から生まれてくるものなどに特徴があります。第4期は地方史や娯楽色の強いもの、さらに、説話、すなわち、これまで出た軍書から名将のエピソードを抜粋・編集したものが出て参ります。享保7年を下限としたのは、享保の出版統制令で新作の軍書の刊行がなくなったことによっていますが、名将の言行録については、有名な岡山の湯浅常山の『常山紀談』などがこれ以降も刊行されています。

ここで注目しますのは、第4期の名将の言行録です。たとえば、代表的なものに、熊沢蕃山の妹婿淡庵の『武将感状記』（正徳六年刊）があります。これはかなり好評だった本でして、管見の範囲で幕末まで8種の刊記が確認できます。和田正尹の序によれば、歴史の概略のみ記された書から漏れた「志士・勇者」の忠義を顕彰することで、太平に胡坐を搔く「天下の将士」を啓発するもの、とあります。こうした戦国武将の言行録は、江戸時代に進行する武士の官僚化が、身命をかけて戦に臨む覚悟に動揺をもたらしかねないことを懸念し、軍事行為を身分的特権として名誉の感情とともに持っていた武士階級のアイデンティティーをノスタルジックに語ることで、回復・保持しようとするものでした。こういった書物の成立の背景について、日本人の日本文学研究では、先ほど述べたような事情もあってこれを追究しようというものはほとんど見当たりません。むしろ、最近アメリカで出ました池上英子さんの『名誉と順応』^⑤が、この間の事情にヒントを与えてくれます。池上さんは、戦国期の武士の精神を、栄えある名誉文化としての軍事力行使にあるとされ、江戸時代の官僚化

に伴う飼いならしの結果、階級の証としての名誉の危機と名誉の焦点移動が起こり、これが下級武士の間で流行した殉死や敵討ちといった事件の核心となった、とされたわけですが、この池上さんの指摘は、先ほど申しました、令名の記録としての第1期の軍書と、名将の説話としての第4期の軍書の位置づけにとっても有効なものでした。

池上さんは、その著書の冒頭にベラーの『徳川時代の宗教』^⑥を挙げられ、「集団主義の日本が、なぜアジアで先駆けて個人の競争に基づく近代化に成功したのか？」という、アメリカ日本研究の伝統的な問いから出発されています。その源泉の一つにベラーも池上さんも武士の文化を想定されていたわけです。ライシャワーは先ほども申しましたようにその成果を政治的文化宣伝工作に使ったわけですが、多かれ少なかれ、こうした実社会に関与する問いがアメリカ日本研究の特徴であることは間違いないでしょう。最近日本でも近世文学の教訓性や武士の文学の研究の必要性は認識されつつあります。私が属します日本近世文学会は五十周年記念行事として、この五十年の日本近世文学研究の総括をシンポジウムの形で行いました。そこで印象に残っているのは、成蹊大学の揖斐高さんの発言です。^⑦揖斐さんは、この五十年、日本の近世文学者は「悪」の文学を研究するには熱心だったが、教訓・倫理の文学に対しては関心が薄く、この方面の研究が今後の重要な点だと指摘されています。また、福岡大学の中野三敏さんも、近世の俗文学の本質を「滑稽」と「教訓」に尽きる、と最近至るところで発言されています。^⑧さらに、先年亡くなられた京都大学の日野龍夫さんは、既に1970年代に、江戸には二つの想像力があった。すなわち、世界の論理を分析する能力を持たない民衆の想像力、これは主に俗文芸とつながる世間話とその関心の対象とする世界であり、もう一つは自分たちの住む世界の論理を分析する知性とそれを変革しようとする情熱に支えられた想像力であり、これが近代を準備したとされています。^⑨それぞれ関心の対象やニュアンスは違いますが、大きく見て近世文学の中で現実にコミットし、現実と建設的にかかわっていく文学はもっと研究されてしかるべきだ、という共通の認識

は確認できるでしょう。

さて、アメリカ日本研究に話を戻しますと、伝統的に欧米の日本研究は中国・朝鮮といった東アジア世界の中で日本を位置づけようとする姿勢が見られます。^⑩すると、日本と中国・朝鮮では支配層に同じ「士」という言葉をあてながら、その内実が全く異なることに気づかざるを得ません。中国・朝鮮では「士」は「士大夫」すなわち官僚を意味し、日本では「武士」すなわちミリタリーを意味するわけです。既に、朝鮮通信使の申維翰は、本国への日本レポート『海游録』において、日本に朱子学の「礼教」などなく、その秩序は兵制・軍法によって維持されていた、と朱子学の伝統を保つ朝鮮を文化的優位に考える立場から日本の支配原理を観察・報告しています。^⑪ライシャワーは、この日本社会の特性を、中央集権的一義性、地位志向、官僚的政府の関与という中国の特性に対し、封建的多様性、目的志向、競争的企業精神の3点に集約し、この国民性が中国より近代化により速く成功した原因だと捉えました。^⑫池上さんの場合は、戦国期の「名誉」の精神は江戸時代に完全に失われたわけではなく、「順応」のなかで、精神的・文化的資源として焦点を移動しながら生き残り、これが日本独自の個人精神を生んだとされたわけです。話がかなり大きな方向に行ってしまいましたが、結論の当否はともかく、アメリカ日本研究が、なぜ武士の精神を大きな関心事としたか、その背景はおおまかに確認できたものと思います。

武士の〈神話〉の復活

では、池上さんの指摘するように、封建的競争精神としての武士道は江戸時代を通じて本当に残っていたのでしょうか？これも議論の分かれるところですが、その答えの一つとして、今日後半の話題の中心である、岡谷繁実の『名将言行録』を取り上げたいと思います。『名将言行録』は、幕末上州館林藩の上級藩士、岡谷繁実によって書かれ、参考文献1252部から、戦国時代・江戸時代前記の武将192名のエピソードを集めた、言わば、近世軍書の集大成的作品で

す。明治3年、戦国期の武将のみ三十巻で出版されましたが、その後江戸前期の武将伝を室鳩巢『鳩巢小説』や新井白石『藩翰譜』など写本の説話集から取材して七十巻に増補、日清戦争期の明治二十九年刊行され、さらに明治四十二年、当時の武士道ブームを受けて刊行され、今日多く残っています。

執筆動機については、国文学研究資料館史料館所蔵の「岡谷文書」に収められた繁実自身による「岡谷繁実年譜」^⑬によると、ペリー来航における米兵の横暴さと傲慢さへの反動だとしています。軍艦の配置と操練に脅威を感じると同時に、日本を侮蔑し嘲笑する米兵の姿が、繁実に深い憤りを与え、その危機感と怒りを契機に、武士の精神が過去の名将伝の中に求められました。また、田口文之による本書の序文では、戦国の武士は身分を越えた競争と実力の世界であったのに対し、江戸時代には身分・俸禄が安定してこの精神は失われてしまった。この競争の精神を呼び覚ますには、過去の名将の言行は格好の材料であり、これを用いて現在の危機を挽回すべきだとしています。繁実は、この田口文之のほか、藤田東湖・安井息軒らで構成され、開国の緊張した時勢や海防策を論じる「文会」に出入りしていました。特に幕府の儒官となった安井息軒には『名将言行録』の校閲を依頼しています。

近世中期の代表的な名将説話として先に挙げました『武将感状記』は、初級学習者用の漢文作成の教材として格好のもので、それがこの書物の人気の秘密でもあったことは、天保14年に出された『統武将感状記』の序文で、編者栗原信充が師柴野栗山の言葉として伝えています。『名将言行録』の文章も、簡潔な漢文訓読体で書かれており、同じ目的に使用されるのをねらったことは容易に推察されます。本書のような漢字片仮名交じり文の校閲を、わざわざ大儒者であった安井息軒に依頼したのも、漢文文章修練のための教材提供と、その作業を通しての青少年への武士道の感化を念頭に置いたためであったのでしょう。

さて、一連の経過から、本書成立の背景と意義を考えると、やはり池上論文の結論部が役立ちます。即ち、西欧列強による軍事的脅威と否応なく対峙させられた時、「それまでいわば眠っていた武士精神が復活し、国難を己の自立

と名誉に対する挑戦と見なす気質」が育まれたことが見て取れます。その結果は、志士の政治的議論が盛んとなり、維新の動乱という現実がやってきます。繁実の人生行路もその渦中に入ることとなりました。その細部は省略しますが、攘夷派志士として京都・館林で活動、特に長州征伐を前に幕府方と対決姿勢を明確にする長州との調停役を命じられています。館林藩主秋元志朝は徳山藩主毛利広鎮の二男で、長州藩の後継者毛利定広は実の弟でした。調停に努力する繁実でしたが、第一次長州征伐の開始に伴い、長州への内通の嫌疑を受け家名断絶、家禄没収の憂き目にあいます。さらに、維新戦争では、東山道鎮撫の官軍に協力する義軍を結成して出兵しますが、官軍総督から偽官軍だとして解散命令を受けてもいます。明治二年正月には、新政府成立によって藩から大赦を得、新政府より会津戦争の戦後処理を任されています。本書の脱稿は、その渦中のことでした。^⑭この不撓不屈の十年余に、本書は完成しており、史書・軍書に広く取材して冷静な記述につとめる本書ですが、繁実と同様、小領主や敗軍の参謀ながら主家の再興をあきらめない人物には、感情のこもった記述がなされます。代表的なのは尼子家の再興を最後まであきらめなかった山中鹿之助です。この問題は次の明治42年版の問題につながります。

武士の〈神話〉の転生

さて、明治になって武士の身分は減びますが、国民をまとめるためのイデオロギーとして近代武士道が形成されはじめます。近代日本における武士道論の成立については、軍人勅諭の草案に関与した西周や、移民問題や黄禍論によって表面化した欧米の日本異質論に弁明した『Bushido』の新渡戸稲造もいますが、名将言行録再版の問題に関して言えば、井上哲次郎が注目されます。^⑮井上は日本型観念論を確立しようとする学者の顔を持つと同時に、教育・言論界では国家主義イデオロギーの普及に努め、その影響は大きなものでした。試みに国会図書館の蔵書から、明治20年以降出されたもので、「武士道」のキーワードで検索をかけ、そこから武士道論書を抽出していく作業を行ってみると、

日清から日露戦争後にかけて多くの武士道関係書が出ているほか、その具体例として戦国武将伝が使われていたことが窺えます。特に、井上が明治34年3月、陸軍教育総監部の依頼により中央幼年学校（後の陸軍士官学校）の大講堂で行った講演をまとめた『武士道』（兵事出版社）の影響が大きいことがわかります。また、井上自身が武士道のカノンとして編纂した『武士道叢書』や、井上の弟子である有馬祐政・秋山梧庵の活躍も目立ちます。

こうした流れのなか出された『名将言行録』明治42年版には、大隈重信と法学博士梅謙次郎の序が追加されています。大隈重信は、開国以来の欧米文化の流入は物質文明の弊害に陥りやすく、封建時代に鍛えられた国民性である精神的美德を薄めつつあるとし、『名将言行録』が国民性の鼓舞に効果的だとしています。国民性論としての武士道論の文脈で本書が再刊されたことがわかります。また、梅謙次郎は、先人の言行に見る教訓の内容を賛美し、帝国青年教育会の代表として、特に青年に対し本書を推薦しています。

明治国家の体制は日清・日露戦争の勝利とともに、維新以来の国家目標を概ね達成し、ここに一種の「社会的弛緩状態」を生みだした、とされています。そこに「成功」「墮落」「煩悶」という青年層の問題が指摘され始めました。この状況打開のため、明治末年から大正にかけて、出版界において「修養書」ブームが起こります。¹⁶修養論は青年の指針としての評論、教訓、偉人伝、史伝の形をとって広がり、武士道論はこの修養論の一つとして読まれた面があります。また、梅謙次郎が青年向けに本書を推薦したのは、そうした文脈とともに、江戸時代この手の書物が青少年向けの教材であったことを再生したと解釈することも可能でしょう。

では、近世軍書と明治の類書とではどこに相違があるのでしょうか？青年向け修養論の一環として戦国武将の伝記を盛んに執筆したのが東大で井上哲次郎の影響を受けた大町桂月でした。大町桂月といえば日露戦争期に「君死に給ふことなかれ」を発表した与謝野晶子を「乱臣賊子」として批判したことで知られる人物ですが、彼は特に山中鹿之助の伝記を、『名将言行録』をたたき台に

書き、そこに忠義の家臣のイメージを付与しました。これが昭和初年国定教科書に月光に向かい艱難辛苦を与えよと願う鹿之助像へとつながっていくわけです。既に、青年より年少の少年向け雑誌として、明治28年から昭和8年まで刊行された博文館の「少年世界」や、これに対抗して明治39年から昭和13年まで刊行された実業之日本社の「日本少年」にも「史伝」の形で武将のエピソードの記事は多々見られ、そうした記事の叢書化も明治後半盛んになり、そこでは競争より忠義を強調する傾向が見られます。¹⁷井上哲次郎の武士道論・大町桂月の史伝小説や修養論・名将言行録再版などは、そうした少年雑誌の傾向の延長線上にあったと見られます。

さて、『名将言行録』の再版をめぐる問題、特に武士道の甦り方の問題ですが、こう一応集約できる、と思います。初版の段階では、眠っていた武士の競争精神の復活が目的だったのですが、再版では、「忠義」や日本人の国民性が注目され拡大・伝播されていったらしい、ということです。もともと、『名将言行録』は、武士説話の集大成であり、今日においてさえそうですが、この分野の百科事典的役割を果たしております。そうした多面的な内容を、池上さんの言葉を借りるなら「文化的資源」としながら、幕末から明治へと武士精神は、その内容と対象を変え、やはり池上流に言えば、「忠義」へと「焦点移動」し、「国民性」という「象徴的」な形で甦ったというべきでしょう。

明治後期の道徳統制については、キャロル・グラックさんが、〈神話〉による家族国家イデオロギーを強調されました¹⁸が、グラックさんの視点からは、武士の〈神話〉もそうした新たなイデオロギーを補完・伝播するものとして、その役割を果たした、という予想がつくと思います。

今日の私のお話はずいぶん生々しい政治の世界と関わっている点で、あまりいい印象をもたれなかった方もいらっしゃるかも知れません。今の私の立場は、やはりグラックさんの言葉を引いて、これに変えたいと思います。「どんな社会も自身の共同体に関する観念に純粹無垢ではいられないばかりか、国家によっては共同体についての諸観念の段階を超えたイデオロギーを産出する場合も

ある。」以上で発表を終わります。

[注]

- ①Gui, Yongtao *A Dialogue of Idea's—Reischauer's Theory of Japanese Modernization and U.S.-Japan Intellectual Relations—* (婦泳涛「ライシャワーの日本近代化論と日米関係—知的対話の視点から—」『アジア太平洋研究科論集』7、2004.3)
- ②本文で以下に述べる軍書の定義と近世軍書の沿革については、拙稿「読み物としての近世軍書」(『国語と国文学』81-4、2004.4)、「サムライ達物語—近世軍書」(『江戸文学』31、2004.11)に詳しい。
- ③国文学研究資料館では、山鹿素行手沢本を核として、平戸藩に仕えた歴代当主や門人の著書・蔵書を伝える、積徳堂文庫蔵書の書誌調査を行っている。(『国文学研究資料館報』第58号、2002.3)
- ④防衛大学校図書館編『防衛大学校貴重書目録』(防衛大学校図書館)1994
- ⑤池上英子著、森本醇訳『名誉と順応—サムライ精神の歴史社会学』NTT出版2000 (Ikegami Eiko. *The Taming of the Samurai—Honorific Individualism and the Making of Modern Japan.* Harvard University Press. 1995.)
- ⑥R.N. ベラー『徳川時代の宗教』(池田昭訳、岩波文庫1996) (Robert N. Bellah. *Tokugawa Religion: The Cultural Roots of Modern Japan.* Glencoe, Ill.: Free Press. 1957.)
- ⑦シンポジウム「江戸文芸研究の可能性」(パネリスト アンソニー・ガーストル、ヘンリー・スミス、笠谷和比古、崔博光、赤間亮、揖斐高、司会 倉員正江、第102回日本近世文学会 2002年6月8日、成城大学)、その概要は倉員正江「日本近世文学会50周年記念国際シンポジウム「江戸文芸研究の可能性」概要」(『近世文芸』77号 2003.1)にまとめられている。
- ⑧中野三敏「十八世紀の江戸文化」(『十八世紀の江戸文芸—雅と俗の成熟』岩波書店 1999)
- ⑨日野龍夫「世間咄の世界」(『江戸人とユートピア』朝日新聞社1977、のち岩波現代文庫 2004)
- ⑩ヘルベルト・ブルチョウ『「ニッポン通」の眼—異文化交流の四世紀』淡交社1999
- ⑪『海游録』(姜在彦訳注、平凡社東洋文庫、1974) p.300-302。なお、近世日本の支配原理や支配機構が「武威」や「兵営国家」に求める議論については、渡辺浩「『御威光』と象徴—徳川政治体制の側面—」(『思想』740、1986)、ヘルマン・オームス『徳川イデオロギー』(黒住真・清水正之・豊沢一・頼住光子共訳、ベリかん社、1990、原著Herman Ooms. *Tokugawa Ideology: Early Constructs, 1570-1680.* Princeton University Press. 1984.)、前田勉『近世日本の儒学と兵学』(ベリかん社、1996)
- ⑫エドウィン・O・ライシャワー「19世紀の中国と日本の近代化」(『中央公論』1963.3、のち『日本近代の新しい見方』講談社現代新書1965に収録)
- ⑬安政元年、繁実二十歳の項。
- ⑭工藤三壽男『館林藩尊攘派志士 岡谷繁實の生涯』(館林市教育委員会・館林市立図書館、館林双書23、1995)
- ⑮西義之「Bushido考—新渡戸稲造の場合—」(『比較文化研究』20、1982.3)、同「Bushido考—新渡戸稲造とB・H・チェンバレンそのほか—」(『比較文化研究』21、1983.3)、太田雄三『＜太平洋の橋＞としての新渡戸稲造』(みすず書房、1986)、宇野田尚哉「武士道論の成立」(『江戸の思想』7、1997.11)、鈴木康史「明治期日本における武士道論の研究—方法論的議論—」(『大手前大学人文学

- 学部論集」2、2002.3）、佐伯真一『戦場の精神史 武士道という幻影』（NHKブックス、2004）、菅野覚明『武士道の逆襲』（講談社現代新書、2004）
- ⑬筒井清忠「近代日本の「教養」（浜口恵俊『世界のなかの日本型システム』新耀社、1998）
- ⑭統橋龍雄「創始期の少年雑誌」（『国学院雑誌』70-7、1969.7）、勝尾金弥『伝記児童文学のあゆみ—1891から1945年』第5章「戦国武将を賛美する—国光社『少年武士道史伝』（ミネルヴァ書房、1999）、同「伝記と歴史読み物」（鳥越信編『はじめて学ぶ日本児童文学史』第5章、ミネルヴァ書房、2001）、上田信道「大衆少年雑誌の成立と展開」（『国文学 解釈と教材の研究』46-6、2001.5）
- ⑮Carol Gluck *Japan's Modern Myths—Ideology in the Late Meiji Period*. Princeton University Press. 1985

* 討議要旨

松村雄二氏は、水戸の『大日本史』は軍書の4分類案のどの時期の特徴に合致してくるのか、と尋ね、発表者は、『大日本史』の編纂は明治まで続くので一概に言うことはできないが、論纂と言われる説話的な部分に、第4期の忠義につながる問題がある、と回答した。

坪井秀人氏は、修養論ブームに軍書や『名将言行録』が乗っかっているとの話だったが、修養論のもう1つの傾向としては、近代人たるための条件を作るという意味での修養ということがある。その中で武士道が幕末から明治にかけてのシフトとは関わってくるのだろうか、と尋ね、発表者は、近代人としての精神性は重要な問題であり、今後の課題としたい、と回答した。

中嶋隆氏は、近世軍書の第3期と第4期の区切りの根拠について尋ね、発表者は元禄11年にそれまでの通俗歴史書をまとめた『本朝通紀』という書物が刊行されるが、そこに長編歴史読み物の最後の区切りがあるのではないかと考えての設定である旨、回答した。さらに中嶋氏は、近代以前の武士道概念そのものがどういう過程で形成されてくるのか、ナショナリズムに利用されるような側面を持った武士道・武士のイデオロギーの成立時期について尋ね、発表者は、第2期に『太平記評判理尽鈔』などの読み方が相当影響を持ったということ、もう1つは山鹿素行の活躍があり、考え方のものは寛文の頃に1つの結論が出ているのではないかと予想を持っている、と回答した。

小峯和明氏は、『名将言行録』のソースがどのくらいの範囲からどのくらい採っているか、について尋ね、発表者は、『太平記』を典範とした漢字片仮名交じりの歴史書もどきの読み物が中心で、幕府の政治に関わる未刊の写本類は平仮名でも使用している、と回答した。